

# きざりてつと

NO.34 月刊

昭和廿六年四月一日 発行 (非売品)  
発行所 岡山県新庄郡吉備町庭瀬七〇七 宇垣方  
吉備 親老協会

## 板倉の合戦 (その二)

治承五年閏(二八)二月四日平清盛は傷寒(腸チフスのような病)に及み、頼みにしていた子のなみの智謀者といわれ、重盛はすでに死し、源軍の防備態勢の整はぬうちに高勢にうみざらうけをいいなむ六十四歳で内死した。本人は老年奈良の大佛殿を炎上せしめた祟りで佛罰のようにならぬと、罵倒して、いさる間に兵馬の嘶く聲が四方に起つてきた。これは源氏の軍勢が都へ入つたのである。平軍は最早や戦意はなく一族郎黨は安徳天皇とそのお母建礼門院を擁し、神器を奉じて西海へ走つた。都落ちなら三日目の六月廿八日に義仲、行家は都に着くと戦塵を掃う皇もなく、後白河法皇の院宣を賜はつて平家追討のため西下するのである。法皇は尊成親王を八月廿日に立太子せられた。これが後鳥羽天皇と申し、天下に二天皇がまします。此世の兆になつた。

平家追討にあたつて兼康は前にも語つたが備中の住人で西國の地理に精通して、いさるので強いて留導を乞ふた。義仲はこれを諾し、倉光三郎成氏を将とする数百騎の先發隊に加はつて共に出發した。攝津、播磨と山陽道を西下し、備前の堺の三石駅に着き、藤野の古、御堂の藤野寺に宿陣した。この時、郷里に残して、た子の小太郎宗康は父兼康の帰郷を知り、手兵を率いて藤野寺へ出迎へ共に酒宴を催して、行軍の労を犒ふたが、豫て謀事を企てて、たので成氏を酔はしめて不意打に夜討をみけて斬殺した。藤野寺は昔和氣清盛の菩提寺として古刹であつたが、後白河天皇の院宣で日蓮宗法梁山福昌寺という。貞享年間池田重政の政業によつて、徳郡の難に遇ひ中絶したが、元禄三年に至つて、御津郡野を口にあつた。

た駒山定成寺を移したものである。境内に和氣清盛の碑がある。兼康父子は備中へ退却する途中、涼行家の置く備前の國府村をも焼き掃つた。相川を渡り、笠ヶ瀬の砦に踏み止まつた。この事実は京都に居る義仲の本営に達した。義仲の怒りははげしく、その臣今井四郎兼平を将とする千余騎は夜に日をついで急行し、備前に入つた。笠ヶ瀬の砦に立籠るや多年恩顧の武士ども馳せ参じて、二千余騎にも達して、防禦障地の構築に全力を注いだ。この砦は平田山の峯、続きになつて、西の方の鳥山にあり、西の麓は笠ヶ瀬川を遠うし、福林寺砦にはさみ木を敷きつめて攻撃軍の障りとし、高地には堀り切りをつくつて阻止した。源軍は容易に攻落し、たのいで里の総官頼隆というものを嚮導として、窺ひに北の間道から前進し、背後から意表をついて攻撃を加へた。砦兵は太刀を抜くも、まもなく急迫に死するもの傷つくもの数は知らず、先を争つて山を降り、落ち、笠ヶ瀬川を渡り、備中路をたどつて板倉城に総退却した。

この板倉城は名越山の南中腹にある。いま八幡宮の祠堂のある北背後で東方の峯、続きの間に堀り切の跡が遺つて、いさる。千日山念佛寺という寺坊のあるあたりを俗に千日といつて、これは兼康が戦死後、ここを千日供養を行つた所だと傳へられてゐる。第平の攻撃軍は急進に手をゆるめ、お息づく暇もなく、幸川に迫り、吉備津宮の社前より名越山の高地一帯に軍を進め、一斉に突撃に移つたので、再び防禦軍は支へることが出来ず、蜘蛛の子を散らしたように退散した。兼康は子の宗康を連れ、主従以下數十名とともに幸うじて城を脱して、落延の板倉川の砦によつて防戦した。この板倉川は現在、真金地を西から東へ貫流して、細流にして、この川を挟んで攻防戦が演ぜられたとは想像もつかない。或は七百年前は大川であつたかも知れないが、板倉城の位置と考へ合せて、昔は千日山といふ。今、この足守川は加茂の御崎の曾根あたりから東に流れ、真金(田板倉)に入り、吉備の中山の西麓を流して、吉備町(田板倉)に至つて入海して、たらしく

これは須賀、長江、川入などの地名が遺っており、又東山地内では中から川砂を多量に掘出すことにより昔の川が助であったと推定せられる。又川の名稱について考へると昔足守川は大井村地内(四大井脚)では大井川といひ、校倉地内に入つてみち校倉川といつていたらしい。その例は高梁川を高梁地内(旧初山)では初山川といひ、川辺村地内(旧川辺脚)では川辺川と呼んでいたと同じ類である。校倉川の地名は、足守川の流此こそ違つてゐるが、この川が助であったことは確實である。しかもこの地名に此名を設けたかと思ふことは、つねに同題である。

追手の部将倉光次郎成澄は先年北陸路の戦いで兼康を虜にし打首にせんとしたが、その死を釋してやつたのに、いまその恩義を忘れ、刺へ弟の成氏を備前に襲殺した行為は天人俱に中るさなき所である。と、成澄は單騎のまゝ、兼康のあとを追ひ生捕してやろうと校倉川の堤防にて組付いたが、相方とも剛の者で力があまつて馬をうら墜落した。芳らぬ勇者でれば、うら上になりになりもみ合つて、いさううら川岸から潤へ墜落した。成澄は信濃の國のわりの水練には不馴れである。それにより反して兼康は道者なものであつたから、成澄の後には成澄はついに叶はず川中で討たれた。兼康は堤に這いあがり成澄の残した馬に飛び乗つて退いた。子の宗康といふは此年二十歳にもなつていたが生來肥満して、たので父とも一町余も行なぬうちに父におくれえしまつた。兼康は敵の追撃を恐れ、宗康を見捨て、森の深みへ紡れ込んだ。この時宗康は大聲で父を呼びとめたので何事ならんと引き返してみると、宗康は疲れ果て、打ち倒れ涙を流しながら、別に用事はなかつたが、ここを最右と思ふので、今一度お父召を見奉つて訣別のお言葉をした、と語つた。兼康は宗康の手をとつて抱き起し、西眼に涙を浮かべて別れを惜んだ。過ぐる治養元年平清盛の命を受け、藤原光敏言成親卿の子丹波少将成経を警固して遠流の時に苛酷な取扱をしたことだ、いまわが子との離別の悲しさに思ひ出されたことであらう。

へら北たが、耻を忍んでこれに仕へ常に胸中には平家の恩顧を忘れることなく、主家再興に志した。悲運にも父子ともに討死した。三百九十余年の後、戦國の際に滅びゆく尾子氏の再興を計り、畢生を捧げ再三毛利氏の虜になつたが脱走して上月城に據り、尾子勝久を擁して最後の旗上げをし、士道の本領をつらぬいた人である。

△ 兼康が兼首せられたといふ踏島の森は三須村の上林緑山(緑山)に踏島の森といふ地名がある。この所を指しているのが通説である。しかし左の理由を列挙して左村の藤本地内がその遺蹟と断定して憚らないのである。

- 一、兼康は戦場から生き延びて平家の陣營を置く思島方面、道北へとする意志があり、もとよりこの地は兼康の領有地で地理は充分知つてゐる筈である。方向違ひの三須方面へ退路を選ばないこと(左村はすでに百六十年前の高村平間に拓けた土地で道路も相通してゐた)
- 二、藤本は往昔森林地帯であつたことは先年、村民が耕作中お中から先住民族の使用した籾生或土器を多数発見したことがある。古墳のあとや住居地は明確でないが古くお地柄である。それか足守川の流れによつて地形が崩れて田圃になつたものであること。
- 三、校倉川の地名が戦傷を意味して通された森林は所々ないが、今程距離でなくしては、緑山は四折もあり藤本は一折余に過ぎず、事實上藤本地内が道場と思はれること。
- 四、嘉永七年二月、幕府の隔中回遊見大給馬には宮内から西へ足守川を渡り左村の山地方面へ通ずる順路に宮内、山内、川入、納竹、踏島の森、それから足守川を渡つて日畑、西尾、山路、三子の地名が載つており、殊に踏島の森には名所のしるべとしてあることは、嘉永は近世を断つて時代であるが名所の名が遺つたこと以上の意見をわつたものである。尚「源平盛衰記」にも踏島の森とだけ書いてゐる。この書は作者不詳であるが京都に住む学識者が、藤原から再永までの二十余年間に起つた源平二氏の興亡を記述した古典的な書物であるが、広く實地を踏査したものではなく、事情を知る多くの人々の言談を綜合して著はしてゐるのである。

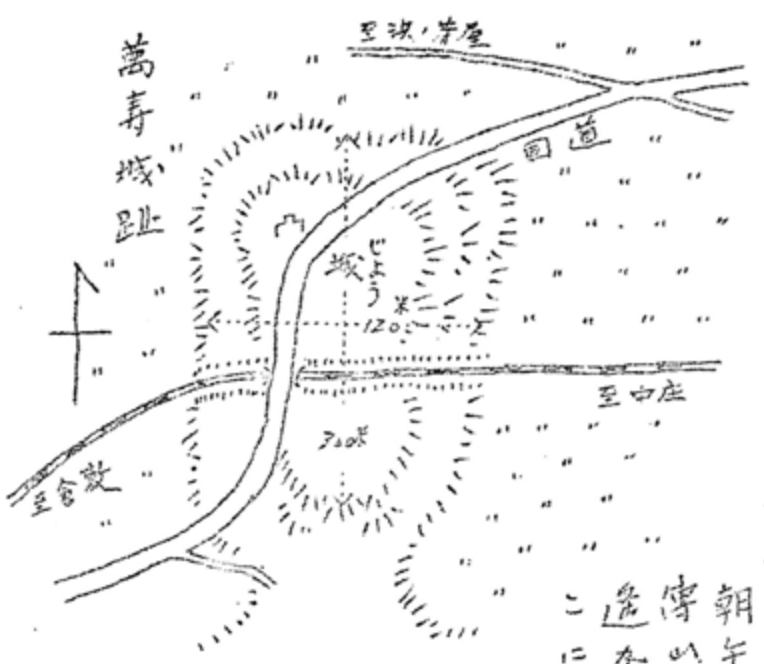
○ 水島の海戦

この海戦は平永二年(三三三)の十月下旬、玉島市乙島に根據地を置く平氏と、これを掃蕩せんとする源氏の追討軍の將兵合せて七千余人が數百艘の軍艦に分かれ赤、白の旗印のもとに多時海面であつた連島の沖合から高梁川の下流附近にかけ、激烈な海上戦を巻き起したのである。

この戦いは武士が集團的軍艦によつて平氏を交へた我國の史上にあつた戦い最初のものである。追討軍は多く北國の武士で、陸上戦では相當の訓練を積んでゐるが海上にとつては不馴れといふよりも経験がない。殊に備前、備中は平氏の勢力が根強よくは、こり備前の賀門の總官を初め連島の地頭平重元、鬼島の豪族三宅又悪四郎等の平氏に恩顧を蒙つてゐる人々は平氏方である。ましてこの争いは平軍の作業計画に効を養つて源軍は殆んど全滅に近い程の致命的打撃を受けて敗退したのである。

平氏追討使木曾冠者義仲は京都にあつて夜倉の戦況を耳にし急據備前に入り、今井四郎兼平等の先遣部隊と合して備中に前進し、倉敷市別府にある萬舟の域に到着した。ここで全軍の勢揃をなし平軍の據れる乙島を一挙に覆滅せんと軍評議を終り陣容を整えんとする處へ京都に居る源行家より早馬で使者がやつてきて源義経の軍勢が京都へ上り義仲を排撃せんとの企てがある知らせてあつたので、義仲は部將の矢田到官代表清と海野彌平平四郎幸廣に後事を委して兼平と共に急いで京都へ歸つた。

平軍は平本三位重衡、越前三位通盛を大将として中國、四國より來援した水軍ども総勢三千余騎を乙島に集結した。かくて城砦を増築し城門を要所に設けて防備を堅め、海上は軍艦を西の水島の途に集結せしめ、北と南とに分けて磯辺の島影に繫留せしめた。これは東の大手を攻撃し



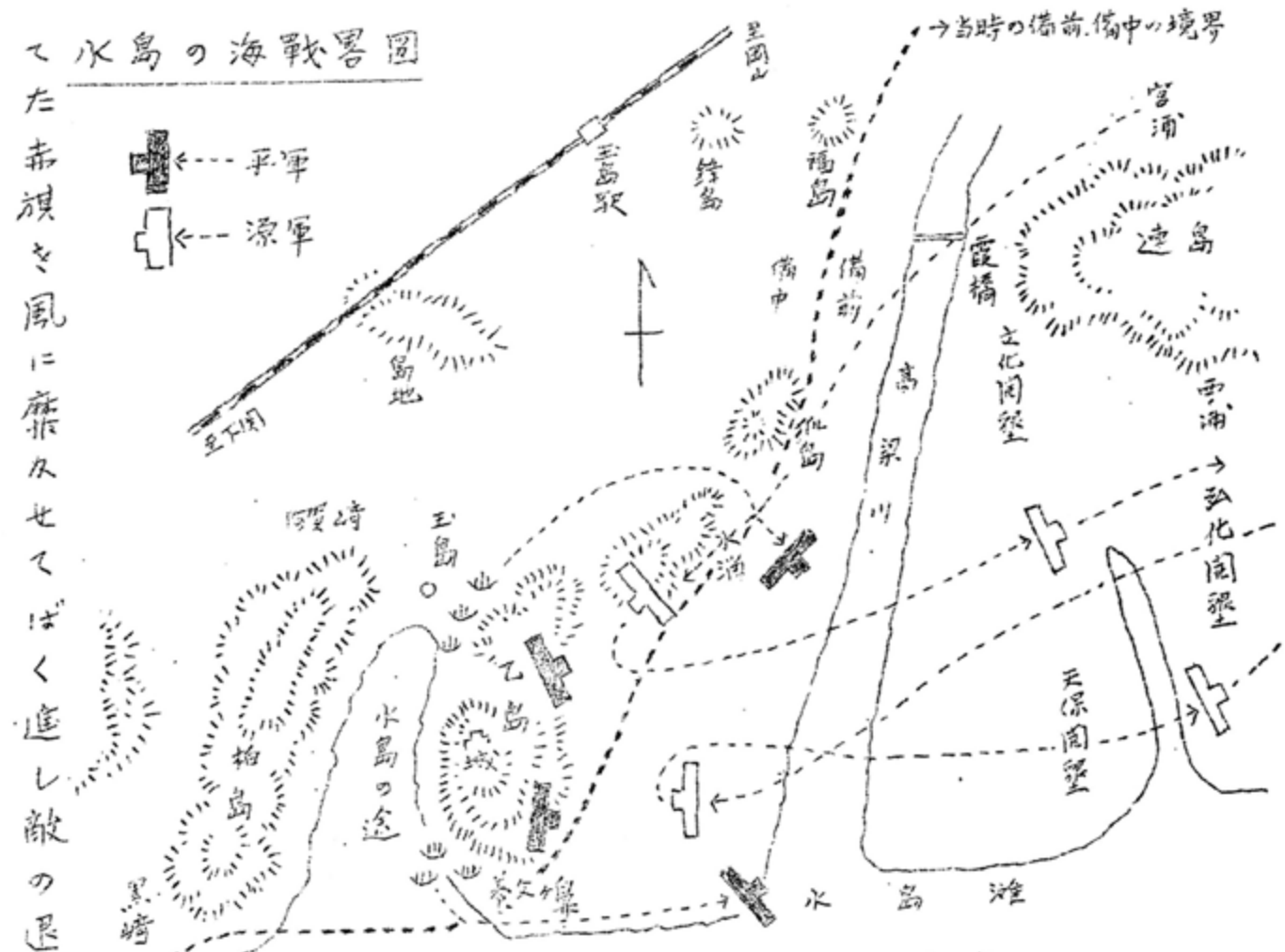
てくるものと想定したのである。源軍は前にも述べたように信濃の山國育ちの兵隊にして必ず島傳に押し寄せてくる。豫期し島に上陸させてなら合圍を定め、南と北の海上より軍艦を迂迴させて敵の背後をつき、糧道を断ち短時間のうちに熾滅せんとする採み打ち戦畧に出た。もし萬一戦に利を失へば、北の艦隊は南下して他の艦隊と合流し城兵を殲らさず架橋させ、西の海上へ退却するといふ逃げ支度の方略を考慮に入れた。

一方萬舟の域に留まつた義清、幸廣の源軍の二部將は兵負四千余を數百艘に分乗せしめてこれを指揮し、鳥羽の雁岸より百台島ノ鼻あたりの海決を舩出して連島の北と南の海上を二手にわかち意気揚々艦の音も勇ましく乙島へ向つて舩足を止めさせた。

朝午前六時頃右翼は連んで乙島の海決につき、磯邊に城の大手に迫り、義清の率いる左翼は海上遙かに關の聲をあげつづつ城に向つて突進した。ここに攻撃は華しく挑まれた。

城兵は意固ある所なりで少しも騒がず東北の文乎の木戸を開いて、悠々磯際へ打つて、城に矢を射つて應戦した。城兵のいであちをみれば部將能登守敏経は、矢にさすぐれた矢筋の達人で一太余の強弓を左脇にはさみ、紺の白糸の村千鳥を纏ひ、合せて直衣に緋織の鎧を着け、長覆輪の太刀を佩ひ、そのあとに続く鎧を着た次郎兵衛盛次は、繁目結ひの直衣に黒糸織の鎧を着け、上総の五郎兵衛忠清は、紺の直衣に赤糸織の片白の鎧を着け、肥田の三郎





兵衛景家は深藍色の直垂に赤地の錦を着け、合せた衣裳に黒糸織の鎧を着け、いづれも平家の公達との華やかな姿である。この外には村田兵衛盛房、源八右馬亮、米田等を始めとして名を得た勇者三十余人が、わかれなきに進んだ。

寄せ手は幸広、仁科次郎盛定、高階六郎隆直等、これらも源氏の剛のものであるが、真光きに進み、三百余人を繰出し、強引に城門に迫らせた。

城兵はいっわつて一時城中に引き退くと見ると、幸広等はこれに氣をええ急追した。沖に浮ぶ左翼の軍船も、この有様をみて、一斉に磯に船を漕ぎ寄せ、陸に降るに降る、力を協せて一大攻防戦が開始せんとする刹那、隊の二手に分かれ、いた平軍の軍船は島の北と南から東海岸にあらわれ、各船ごとの袖にた

船に内着し、打撈をちて引き寄せ、抜刀して戦力の弱、船子をかたつばしに切り倒した。この船子たちは鶴島(倉敷の西、神社を祀る鶴形山)あたりの浪辺に住んで漁撈を業にして、いた水夫で、源氏方の催促によつて強制的に引つぱり出され、僅かな労賃で軍属として従軍したもののつみである。船の操縦には自信をもつて、いた武術を身に付けて、いた記でもなく、ただ多年海の生活に馴れて、いたこと、災いして敵の目標になつたのである。陸上からこれを見たら、源氏の部隊は思ひもよらぬ海上の奇襲に慌て、いたところへ城兵は激しく逆襲にうつたので、退却を始める。船に乗り移らんと、大混乱となつた。この機を運せず、城兵は高折なる散々に矢箭をあげ、せかけたので、海浜に打たれるものは多く、辛うじて乗船したものの若手のみ軍はすばやく、船に飛ぶ乗つて、減多打ちに切りまくつたので、手傷を負ふものも少く、あらず、軍艦は次第に波に揺られ、沖に逃げ海上の戦いに移つた。源氏方は戦いに疲れて、上には船は風波に漂い、本の葉のように、船の側面に立つこしが出来ず、船底に潜んで、いたものは乗りうつてきた追兵に鎧の袖を踏み止められ、首を刎られ、船側には、船に溺れ、いたものも矢箭の的になつて、射られ、海中に轉々落ちて溺死する惨状である。(おわり)この項未完

本社 都窪郡吉備町塩川 電話(吉備)三三四番

大和酸素株式会社

岡山、電話②七九〇六 水島、電話九三〇

営業所 岡山、電話②七九〇六 水島、電話九三〇

業課

酸素製造販売  
カーバイド  
熔接アセチレン  
電気熔接機  
其他熔接材料一式

魚進 岸本商店

鮮魚・酒類・氷卸小売

本店・西花尻△ 支店・本町電三〇ノ乙